

「笑ひ五年」に「泣き七年」

浄瑠璃のコツはこゝ

竹 本 津 太 夫

藝といふモンはなか／＼難しいモンでおましてな、浄瑠璃やかて笑ひ五年の泣き七年、つまりほんまの笑ひを舞臺にうつし出すには五年の修業がかゝるといふのだす。あの時政の笑ひな、あれは六十なんぼに笑ひわけらるのんやが、わたしは、時間がかゝるので簡素にしてまんねやほんまの笑ひやと五分間もかゝらうといふどえらい笑ひ方だす。でも時政や時平の笑ひは、腹の底からの力でやつたらえゝののだが、寺小屋の松王の笑ひとなかなか／＼むづかしおますせ。

わたしの師匠など、松王は初め笑ふ、その次にはうれひを含む笑やと教へてくれましたが、なか／＼若い太夫にはでけしまへん、芝居にはあんまり出まへんけど「新薄雪物語」の三段目に兵衛館いふのがおますが、こゝに幸崎伊賀守といふのんが、上使に來まんな、ところうが、伊賀の守は腹を切つてるンやさかい、その場をば白布で包み苦痛をかくして、刀を杖に笑ひでまぎらさうとするのンですが、この笑ひが難かしい、ウハ——ハツと笑ひかけるが傷の痛みでウフツと息をひくこの呼吸は文字には書けしめへんやろ、けどなか／＼出来るもンやおまへん。

また「大江山」の二段目頼光館の段で、渡邊の綱、白井貞光、占部季武の三人が頼光を看病しとつて、なんちゆことなしに笑ふんだすが、これは義太夫での笑ひの玉様ともいふもので、三人様人間を一度に笑ひわけンなりまへん。わたしはその當時文樂を退いて臥てはつた名人の升太夫はんとこへならひにいきましたか、綱は豪傑たすさかいウアハツハツと笑ひまんな、貞光はヘツくく季武はテヘツくくやつたら、三人の違ひが一ぺんにでけるもンやと教へてくれはりました。この三人の笑ひをば三味線にあはせて語る事は到底若い人にはでけまへんな、それと思ふと世話物の笑はやさしゆて、鼻を動かして輕うやれば、浮はつた人間が自然に現れて來ます。泣くのンでも同じことだす。たゞお客を泣かさうとかつたら、決してお客は泣いてくれはれしまへん。自分も語りながら泣くほどの情愛がないことにあきまへん。また沼津の平作の落ち入りの時にも、相當の年の太夫はんは、人間の死ぬのンをようけい見てるさかい、ほんまの人間の死にやうを知つとる。そこで平作が「なんまいだぶつく」といひもつて死ぬ時には、をはりの方は「な」はいへてもその後が續かんやうになる、こゝがほんもの藝のねうちだすな。